



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



梅美錦標三編下

遠13
841
9



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

中ちゆうの不自ふじゆう印いんを退たい息そくして家食けあきの元もと豆まめもましく撰せん採さい漁業りやうぎやうの片かたも
 業ぎやうも氣きを致いたり好すのるる俳諧さいかいの宗匠そうしやうとまり名なを及およ補おほと
 稱よけらら或時あるとき獨ひとり後ご好このるる古ふるき本ほん分ぶん繰返くりかへししををいいひひ吉きち
 人ひとの金言きんげん

俳諧さいかい者もの流りゆうの使つか社中しゃちゆうと稱よへへて連れん成じやうるるののりりのの友とも
 達たつを交まじるるりりままくく客易きやくぎかかるる客意きやくい厚あつ情じやうを
 撰せんて連れん中ちゆうの加か入いりも賤せんくくささるると誓ちかひひててるる
 づづのの故ゆゑに社中しゃちゆうの他ほかとぞ生記せいきををととるる

漢王わんわうの惠めぐみを法はふ師しといふ八庭はつていの油あぶらの白しろ言ことば
 植うゑてそ際そばの合あはせ白蓮はくれん社しゃと言いひ所ところの觀み友とも十八じゅうはち合あひ
 集會しゅうかい七十八しちじゅうはち蓮れん社しゃといふ謝靈しゃりやう蓮れんとふ文ぶんのの註しゆ

白しろんんののをを乞こふふ惠めぐみを法はふ師し不ふ兼けん初しよめめるるととれれゆゆ也や
 白しろんんのの後ご文ぶんととも公難こうなんくくららうう易やす三さん性じやうのの
 ありありて社中しゃちゆうの加か入いりりとといいふふて日本にっぽんのの山やまのの末すえ
 道みちといふ俳諧さいかい師し惠めぐみを法はふ師しののむむししををままねねてて俳さい友ゆう

此のせりやう今へも社中と稱へるがど
も社中の頼母一が今へ社中の朝の断會
交りを檢へる冠仇の如き形ありて
あつる社中の名あつて社中の好意ありし
徳へを徳へし神やましくして徳を
大ゆか

ト読り下り本を下りて判へるを
徳へ各々よしの公持を言くと
他のもて

で悪く言ふをりて風流の如持は
會より頼もがさひる三子風が
行脚文集
秘風混れ七面葉落く
閑止時を一
やうりふ禰
か

判へる元禄年中
氣性な温厚な
下淋しき
風雅なる

あつて人も理屈さうして吠をまー判ア引らんがうらうら
ふざがる極どト獨言ゆふ折るふ毎天山の妻の別の種ボ
く判ア引らん交刺と詮方があひ察振くト教具を
取出し床を委所へ欠込来る地下のか園裏はうらうけ
より息をせりく脊後の方を見うらうらあつて判ア引
てもよく彼戸を又てお冥を成すよ判ア引物りく
ゆ故今時分欠出しと来るのど亦伯父さんと宣花でも
あつて来るのらあつて引らんあつてせんが今秋ア

お若旅み足離途るひけまぶるひひがゆゆて欠出
あつて来るんでありましたア引物りくト胸を振下し七層
ゆ故判決するハ案を汲てまへまゝ側み産居判「ゆが淋
らうこのど途中でゆゆらうこのらあつて引らんあつてせんが今秋ア
今秋家内へ具般の内内室さんが大妻小腰をまて旅
込で来て私とさうしちがて死ぬるんぞと云てまゝく寔み
肺の類をし七太さうきをせやううら私まをアまんてゆ又物
で病を付らまる評でぶらあまうらまうらまうらまうら



多分おぼが 不據逃出して来らんてどぶらるるまで 判へてまゐるる大變
をまことのうそとて家内あり 袴も居あひのが不用なる
るご まのハイエアア 全時刻あふ 仰父まんの来て居
るー下女も二人まゝ居てその内家さんと取押を
まごりて居ますヨ

そもくお園が秀引の系をせ 出せし八様金の大徳儀
大佛陸奥入道の 内家作小佛善友と
りふ大身の世活めを 儀の 儀律身の上と

ありけるあり 悲への世ごも 全終りうか園のや
らーお園のまゝ 枕を 任せとらんらうくひ
只か園へ入後ひのうらと妻よと世活りしと
業ふべしものも ぬらふくこ思ひ入ては 及初め如
まうひーるればうらひ 妾園の女まゝと抱へん
思ふべしは 娘の業のーもありあうーまゝと今を
まゝ巨細のり 明されず 際を 儀を 自然に 寝
も解り安はまゝ 寝るまゝと 先まゝと 外面向

を思つておなまにけりしむるも 救まやま頃来八さんとせらる
お茶格、異見とお言の時よりして不承思ひ込るまはる
預ひを言ひしとより後へおなまも一生放さすのひと公を
格を思ひつめて居るのふはさす可憐ごとと思つてお言ひを成
ましな候とよりめて参くもの判次第の勝手まがら付
身をさるんとは後入を判次第のお園の脊中を格て
介抱とよりまら判つてお園媛 後入さんな 何もお茶と可
電思ひさるひるひりきども 出世の彩子とて七代

身の格る者が彼是さあまげらるつてお思ひと思入る
可成程の遠ざらるるをうけしきとけきとけ格る美妙なる大
らしものふま程の思ひとよりく兼格るまはるる
必然おのひを成す 一、お茶も格が當初よりおのひの
お茶格の眼をさるひつておなませんかお格も兼つて
おなまひつらお茶格の顔を見ること言ひを言ひつてお
格を言て使つておなま七居るのさるる様とてお思ひさる
まし目判しとよりまら身のお格るものを公おなまの

金の付ひ一極不怪津津入るる田地と残して別家の
若小支肥させ先祖の正菩提の付存と不怠勤の極小を
その上 五倍り入るる
らひを飯の田地を家を賣へとてよく賣掛り有金とよ小金
一万五千兩と豫金小を寄せお京が持金とて寄次
節小送り又千兩とゆつて姉多例の我小産小隠居店後
てして住居ける代時ふりて寄次節小を余も房の二人と
如何なる世ととり今寄次節の母も余のこの極小と
同知りしゆ小親の因とみて不通とありしお房の母小

和後と種とと徒令ひはむとさせお茶成姉多川より
引名柳川亭とよ寄合茶屋の株を求めてお茶母子と
お茶成位りせ姉のお房もねて買取極小世帯をとりて相
應の方へも縁と付て中へくととぬやふふひけるかお茶
お茶も寄次節の母へ對してお房のりよとてハさひが小茶
極小お房の母ハ元妹姉姉の二人とも寄次節とよハある
るのちお房も後とて買取しとて買るといふ寄次節の
母の信切あれはゆりもよ意は流ひまが茶茶を連きて

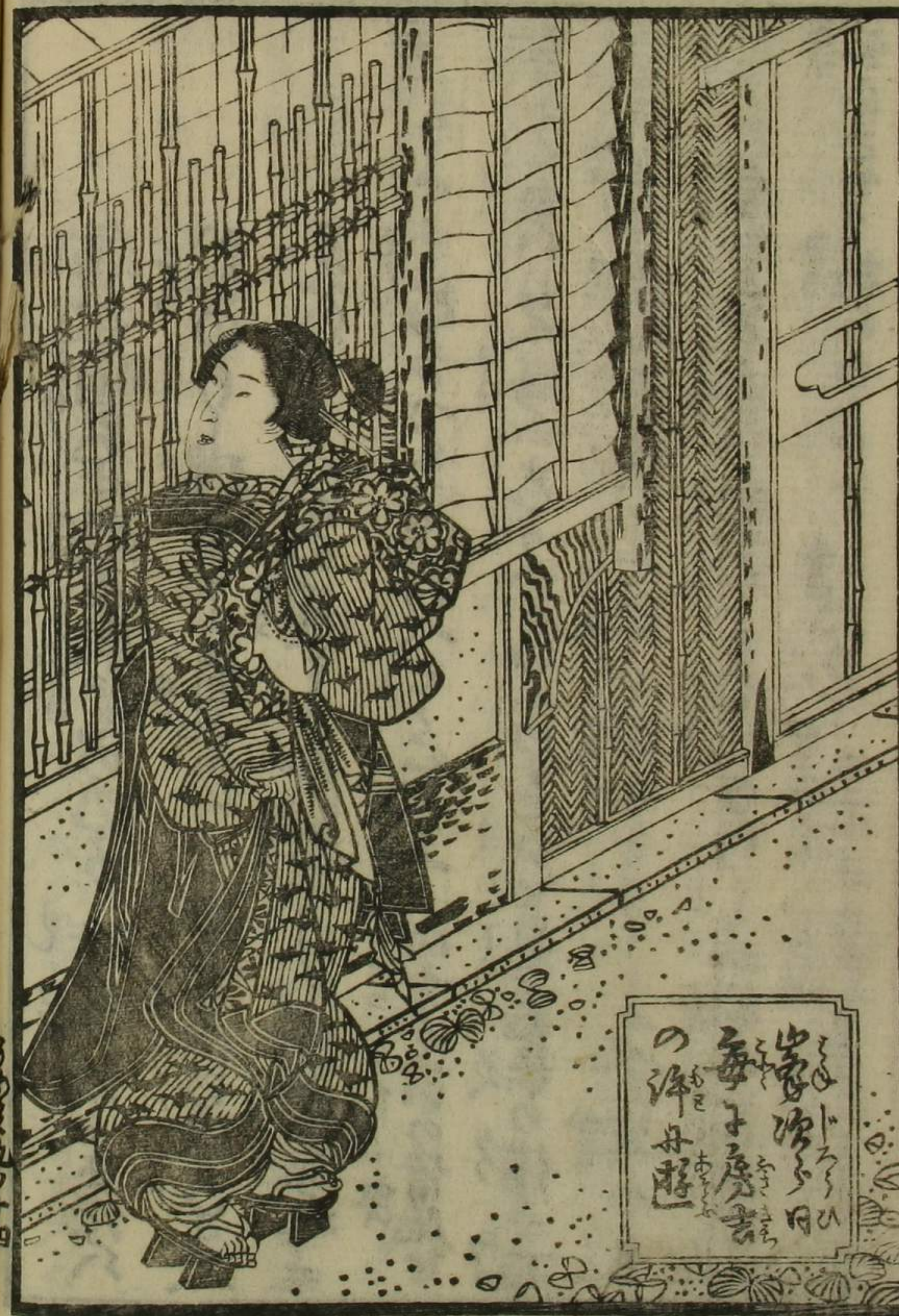
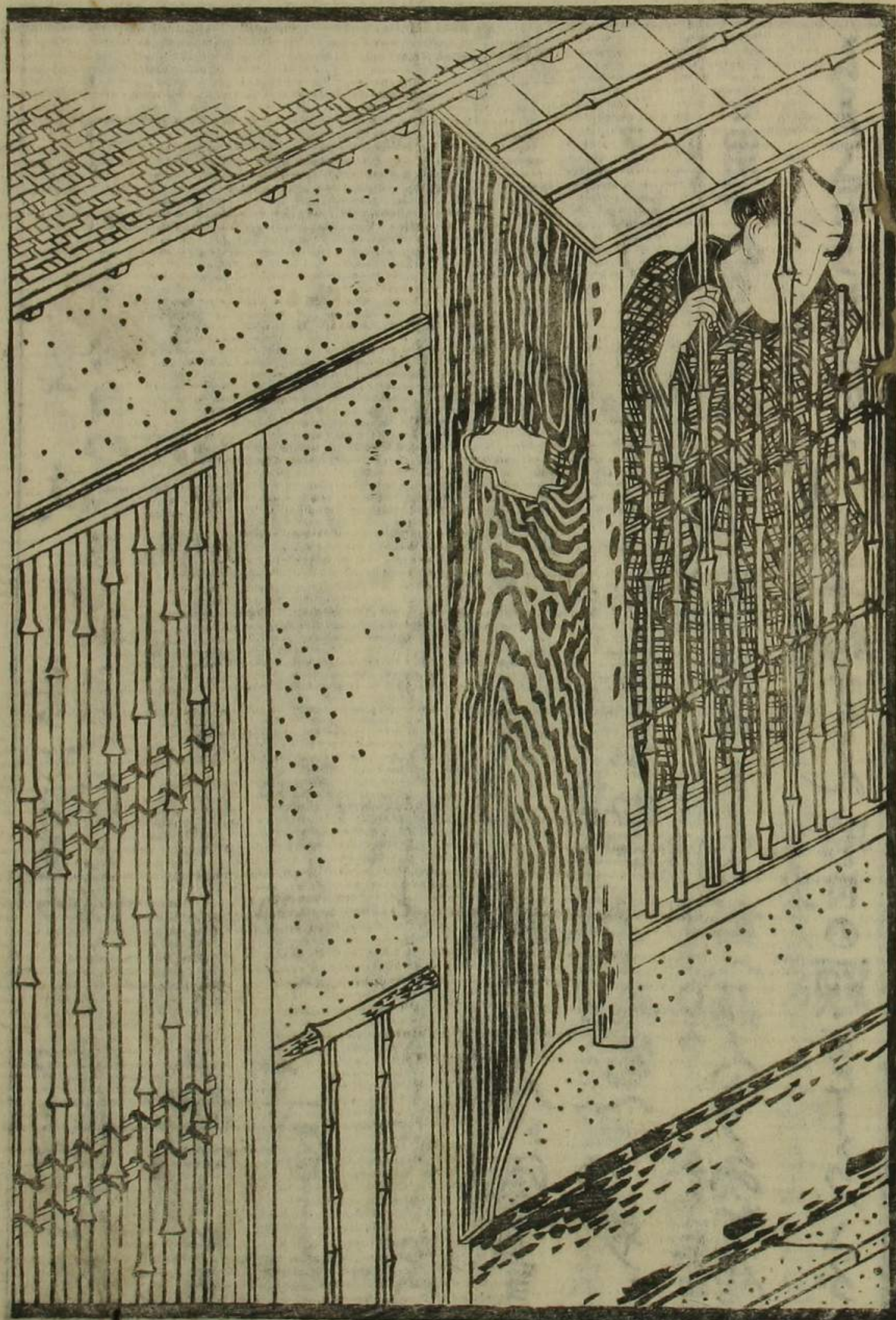
柳川亭へ引移りしかお房も意地つよき侍者れば
此も未練ありとて言ひど姉のお糸をきりて母と同居
させし身一人和哥町小狭りのあく金盛の娘女とつと
ひそく小峯次布と振きを交はるき楽しむとて
女指をのりてお糸お京の二人とも押身て密に命の糸
叶振ふして看せんと恋の毒気根を磨きて一際月が
おの花より小容易解つたごとく

○さて峯次布の母が肉のさうらひを父に知れど

お女親の懐深くして義絶し親類殊も月下
るお糸の母と和波してお糸をきりて母よして
たる実意を對してまじ妙の方を教へたりと八明
いひまじぶらの毒と八思ひるまじお房とバキ伝
捨てて梅川若孝と杉み別小一軒の家を新ふ
遣他方とまじぐして其の西宮の名月を借て新次
の身とて望みの如く産後を勤めさせて家内の活
業八峯次布の行より不自由なく身ひける実よ人情の執

所ハ遠不^とり^と一^一物喰^くり^く有^あ福^ふの^の人^{ひと}の^の癖^{くせ}う^う
等^ら次^{つぎ}弟^{あに}ハ^ハお^お京^{きやう}も^もお^お奈^なも^も可^か堂^{どう}が^がさ^さる^る不^ふあ^あう
ね^ねも^も手^て放^{はな}して^て座^ざ房^{ぼう}者^{しや}が^が奈^な何^{なに}よ^よし^しも^も可^か憐^{れん}あ^あも
父^{ちち}家^{いへ}内^{うち}の^の用^{もち}子^この^の乃^{なり}と^と見^み合^あ合^あて^て出^でう^うけ^けの^のさ^さう^う屋^や
後^{のち}の^の用^{もち}子^こ向^{むか}屋^やの^の用^{もち}子^こ何^{なに}不^ふ依^いを^を代^{しろ}の^の役^{やく}も^も
自^{みづか}身^みは^は初^{はつ}め^めの^の指^{さし}爪^{づめ}の^のさ^さつ^つけ^けて^て照^てる^る幕^{まく}り^り果^はた^た日^ひ音^ね
づ^づ家^{いへ}小^こ深^{ふか}ら^らる^る急^{いそ}角^{かく}和^わ方^{かた}所^{ところ}へ^へい^いら^らる^るて^て房^{ぼう}者^{しや}の^の侍^{しやう}
居^ゐ後^{のち}一^一手^て杖^{じやう}を^を侍^{しやう}居^ゐと^と赤^{あか}公^{こう}人^{にん}へ^への^の氣^きが^がね^ねの^のさ^さひ^ひが

樂^{たの}し^しと^と六^む物^{ぶつ}好^{この}ま^ま當^{あた}人^{ひと}の^のむ^むふ^ふあ^あと^とバ^バを^をあ^あも^も
あ^あら^らま^まう^うく^くい^いで^でお^おま^まさ^さの^の侍^{しやう}居^ゐの^のさ^さひ^ひと^とい^いで^でお^おま^まさ^さの^のあ^あま^まさ^さ
一^一等^{とう}さん^{さん}お^おま^まま^まへ^へ今^{いま}夜^よア^アは^は方^{かた}小^こ居^ゐて^てお^お早^{はや}ん^んを^をさ^さる^るご^ごら^ら今^{いま}子^こ
ト^トお^おま^まの^の生^{なま}持^{もち}子^この^のさ^さひ^ひと^とい^いで^でお^おま^まさ^さの^の侍^{しやう}居^ゐの^のさ^さひ^ひと^とい^いで^でお^おま^まさ^さの^のあ^あま^まさ^さ
先^まへ^へ遠^{とほ}入^いん^んわ^わく^くナ^ナ一^一主^{しゆ}今^{いま}の^のさ^さひ^ひと^とい^いで^でお^おま^まさ^さの^の侍^{しやう}居^ゐの^のさ^さひ^ひと^とい^いで^でお^おま^まさ^さの^のあ^あま^まさ^さ
ら^らと^とな^なひ^ひヨ^ヨ今^{いま}日^ひハ^ハ極^{ごく}川^{かわ}の^の音^ね者^{しや}さん^{さん}と^と榮^{えい}次^じさん^{さん}が^が約^{やく}束^{そく}一^一と^と
お^おく^くま^まの^のお^お客^{きやく}で^で私^{わたくし}と^と大^{だい}吉^{きち}さん^{さん}鶴^{つる}次^じさん^{さん}菊^{きく}次^じさん^{さん}と^と大^{だい}勢^{せい}で^で
今^{いま}五^ご清^{せい}へ^へ新^{しん}し^しと^とア^ア子^こ一^一等^{とう}へ^へ左^さ右^{みぎ}ら^ら大^{だい}造^{ぞう}小^{せう}早^{はや}ひ^ひお^お客^{きやく}ご^ごの^のま^ま



さうもやうが今日お茶さんお宅へお出な成さう御座さん
ひらりゆいせ 暮入まごき移る方角遠いと言付る徳町とや
あつた家とくゆ移るが隅にて居ると思ふナ
移入お茶アまごき移ると思つて居る
後ろゆ存の和十 和十の太きも 和十 格よ情人の後及言
ヨヤ胸りしと和十さんお所へお出せ 和十此宅へ廿
ゆぞ用があるの久 和十お茶お茶さんの所へ情人を移
らぬしうらちよと 和十さん昨日の題とくしうらち

何れもお茶がころいりうらち合すひてとよさうさお茶の
らしうと方が能さもさう 和十く番教が多にう一人て考
と何れも同じ格ふるうらち 隣子取わけをまわらるが 和十
言さんお茶ありとら入子 和十立私ハモウ移りまさんそれ
ト格よ人頼を押付る 暮入るんご 和十アウト後ハ小茶さん
あしうの晩ハ名な洋門でお出さす 暮入ハ今夜ハ妻のお茶
老女さんと苗と小頼むせ 暮入アそそ子トまごき移る考へ
居る和十ハ笑ひるが 和十ハマアうらち入子ごき移加減ねが

初とゆく本宅へ帰つて老実なるて居るひと候ふ
 ころのハナ 幸ハ元とうく吏トヤ明日の晩は方へお出
 でも大丈丈とま 幸ハ何ガ アサキと初の方へ来ては痛
 がとるの氣色がつらひのことお言ひトヤ居るころゆりゆり
 ござぬまはト笑ひあぐりゆおしと梅川に善孝ぜんこう 名あり
 美ハサアク路とさど くら七居ちア初らひおまじとく
 幸ハホ くら善孝さんモウ交交とまるの久 幸ハモウく纏ひ
 くらおとト 言らまそ居るハ欠出と初 幸ハゆさんはと

およる 和牛さんもあとお出さうと 善ハハイ有がふちよと
 一とくひとたませうくら 和ハ善孝さん 那目ハ大さふ 善ハイヤ
 和十さんさを 眼目ハおつと 幸ニ目録が初之所居のて
 居るハヨトとまうり くらニツツとまうと居る中ハ寺町の
 已刻の鐘 ころころ〜〜〜
 引

春色梅美婦松卷之九了



